親子間のズレが子どもへ与える影響についての質的研究

—心理専門職者が行う親子面接の視点から—

丸目 真也乃

Ⅰ　問題

1．親子関係について

恩田・伊藤（2004）は，「親子関係とは、親子間に形成される対人関係を指す。行動のやり取りとしての社会的相互作用の経験の集積から生じるものである」と述べている。また，親子関係について平木・中釜（2012）は「生存や身体の安全のために必須である親子関係は，心理的サポートや教育・しつけ提供の源泉となって，親が子に与え，親が子を守るという親から子へのベクトルが，親から子，子から親への双方向性の関係へと変容していく」とも述べている。さらに，池田・楠（2019）は，「養育者との間に安定した愛着を形成することは，健康的な内的作業モデル（愛着対象は自分を保護し助けてくれる存在であるという確信・イメージ）を形成し，心身の恒常性を維持していくことを可能にするものであり，子どものその後の一生に大きな影響を与え続けていくことになるのである」と述べている。

2．親子間のズレについて

山田（1994）は，「親子間のコミュニケーション過程における情緒的評価のあり方（認知のズレの有無）が青年期の情緒的経験のあり方に影響を及ぼし，ひいてはそれが全体的な親子関係の良し悪しにつながり，最終的に青年期の人格発達に影響する」と述べている。また，親子関係が親への依存から相互的な関係に移り，親のしつけや態度を子どもがいかに受け止めるかを親は分ったつもりでよく理解していないことがある（壁谷澤・長澤，1984）。藤原（1997）は、「ズレを承知してズレはズレとして一貫性のある連続と流れの中で体験し認知する」というポジティブな面もあることを述べている。このように，ポジティブな面とネガティブな面の二面性を持つズレは，心理臨床において展開される面接の流れの中で深く関わっている。

Ⅱ　目的

先行研究では，親子間のズレは子どもの発達や親子関係の不和に様々な影響を及ぼすと述べられていた。親子面接において，このようなズレを感じる，あるいはズレによってカウンセリングをする際に困難さを抱えるセラピストは少なくないと考える。しかし，親子面接における心理臨床家を対象とした研究があまりなされていない。そのため親子間のズレを検討し，心理臨床家が実践の示唆を得られることによって，クライエントや相談する家族が，より適切な支援を受けることにつながることが考えられる。

したがって，本研究では親子間のズレに着目し，それが親子にどのような影響を与えているのかということについて検討する。さらに，心理臨床家が苦慮している点や配慮している点を明らかにし，親子関係のズレを面接の中でどう扱っているのかということも併せて検討する。なお，本研究では，親子間のズレを「セラピストの主観からみた，親と子それぞれがもつ予測と現実との差異によって生じた事象として捉え，その多義的・主観的・動的なズレを明らかにすること」と定義する。

Ⅲ　方法

調査時期　2020年9～11月

研究協力者　心理専門職者（臨床心理士または公認心理師有資格者）で，親子とも同一のセラピストが面接担当である面接（親子同席面接・親子分離面接）経験者とした。研究協力者は以下の6名に行った。

事例	性別	年齢	臨床歴	臨床領域
A	女性	34	7	教育
B	女性	38	6	医療
C	男性	38	13	教育・医療・産業・福祉
D	女性	30	6	医療・教育
E	男性	70	3	教育・福祉・司法
F	男性	34	9	医療・教育

調査方法　インタビューは，半構造化面接を実施した。質問内容を事前に研究協力者に提示し，あらかじめ考えてきてもらい，その内容をもとに協力者の回答に応じてインタビュー調査を行った。

調査内容　フェイスシートでは，性別，年齢，臨床歴，臨床領域を尋ね，回答してもらった。

予備調査を実施し，質問項目を精査した結果，以下の4つの事柄に関する質問を作成した。

① 親子面接において，困った経験について教えてください。

② 親子面接において，親子関係のズレが生じていると感じた経験について教えください。

③　親子関係のズレが家族や子どもにどのように影響を与えていると思いますか。
④　親子面接において，配慮している点について教えていただけますか。

調査環境　研究協力者と相談し，個人情報などを守秘できる場所で１時間程度実施した。

倫理的配慮　研究協力者には本研究の目的，インタビュー調査で得られた情報の取り扱いなどを研究倫理遵守に関する承諾書のもと説明し，同意を得た上で署名していただいた。

分析方法　現象学は，エドムント・フッサール（1859-1938）によって創始された。「現象学の目的は，日常的な生活経験の現象について詳細な記述を行い，その結果として“物事そのもの”，つまり現象の本質的構造に関する理解に到達すること（マクオッド,2007)」である。ファン・マーネン（1990）は，現象学というのは，その意味を掘り起こすことで生きられた経験を豊かにしようと試みる生きられた経験（現象）の記述的研究であると述べている。現象学的アプローチを行う際，テーマを生成する。現象学的なテーマは経験の諸構造として理解されていると捉えている（ファン・マーネン，1990)。本研究では，インタビュー調査を行ったすべての事例の録音データを逐語録に起こした後，Poul F.Colaizziのアプローチを用いて分析を行った（ホロウェイ，2003)。

Ⅳ　結果と考察

分析の結果，「親子関係のズレとそれが子どもに及ぼす影響」では，【ニーズの違い】【世代間ギャップ】【親の価値観の押し付け・親基準】【夫婦関係】【許容量超過】【物理的・心理的距離感】【社会適応と実際】の７つのテーマが生成された。「心理専門職者の苦慮した点」では，【無自覚】【困り感の無さ】【親子と専門職者とのズレ】の３つのテーマが，「心理専門職者の配慮している点」は，【キーパーソンⅡ共有理解】の２つのテーマが生成された。

親子間のズレは，それが親子関係の不和に発展し，子どもの心身の発達に悪影響を及ぼすことが明らかになった。また，心理的負荷が大きく処理能力を超えてしまうと身体症状や精神疾患になって出現し，日常生活に支障をきたすことも明らかになった。このように，ズレは様々な悪影響を及ぼしていたことが窺える。一方で，親子が面接の中で互いにズレに気づくことで，相手を知り，理解することに繋がるという側面も見出された。互いの想いや考えに触れることで，本来伝えたいことが浮き彫りになり，なぜ関係がこじれていたのかという問題と向き合うことが可能になると考える。また，その問題が見えてくることで改善点が明らかになり，そこに働きかけることが解決の糸口となり，親子関係が良好になることが可能となるのではないかと考察する。さらに，親子が互いを想いやるというポジティブな願いからズレてしまうことも明らかとなった。これらのように，ズレによって悪影響を及ぼすこともあるが，親子の間で良い関係要因としての働きを持つ背景が隠れていることもある。そして、それぞれがはっきりと別れているというよりは，相互に関係しており、曖昧な境界を持ちながら連続体として作用していることが考えられた。

しかし，ズレがあまりにも大きすぎると治療や支援につながらないということもわかった。壁谷澤・長澤（ 1985 ）は，子どもが独立性を獲得するためには，母子間における意識のズレをなるべく最小にとどめ，母親の子どもの発達に対する理解が必要であることが明らかになったと報告している。では，そのようなズレはどのような違いがあるのか。本研究では，治療同盟を組めるか組めないかということに言及する。例えば，親子のどちらか一方が治療に協力的であったとしても，もう一方は拒否している場合である。あるいは，クライエント側に困り感がない場合，や変化しようという意思がないなどである。他にも．治療や支援に繋がらない原因として環境要因があげられる。例えば、研究協力者の活動する地域では，離島に関連する事例が多々あり地域特有の閉鎖性や地域性から，親が世間体や人の目が気になり支援に繋がらないことがわかった。その背景として，閉鎖的な環境で心理支援があまり浸透していないことや、心理的・発達的な問題がみられたとしても家族や住民の助けを借りることでなんとか生活していくことができるなどが考えられる。そのため，離島などの地方へ心理臨床分野における支援の充実や個人に応じた支援への理解が今後の課題になるのではないかと考える。中村ら（ 2007 ）は，「子どもに対する認知的心理距離を近づける努力が日本の親，ひいては社会全体に求められている課題である」と指摘している。このことから，親子間だけでなく，子どもを取り巻く環境要因とのズレにも働きかけていくべきであることが窺える。

【引用文献】

恩田彰・伊藤隆二（編），黒田実郎:「愛着」「愛着理論」，芝辻益子:「親面接」(2004)．臨床心理学辞典．八千代出版株式会社．p. 2，p. 63.

壁谷澤万里子・長澤由喜子（1985）．中学生の母子意識に見る親子関係（第２報）―接触度・認知度における意識のズレ―．日本家庭科教育学会誌，28（2），71.